

足しげく通った大好きだったお店が、何らかの理由で閉店してしまうというのはとても寂しいものです。大好きだったラーメン屋さんとかレストラン、食堂。洋服屋さん、床屋さん、ま、とにかくどんなジャンルでも、居心地のいい空間が無くなるのは、中々な喪失感を感じるものです。僕にとっては、はい、もうお分かりだと思っておりますが、そうです、行きつけの酒場が閉店するって、かなりのストレスになるんですね。

最近のハナシです(自粛要請の前です、念のため)。通いなれた、大好きだった酒場が店を閉め、その店舗を、知らない人がほぼ居抜きで、引き継ぐ形で新しいお店をオープンさせました。当然、酒場。

人の心理って不思議なもので、あ、僕だけでも知れませんが、「以前のお店」が大好きであればあるほど、同じ場所に来た、オーナーも店名も暖簾も変わった「新しいお店」をなかなかモヤモヤした気分で見えてしまうものです。何となく斜に構えて、少し地悪な感情を、まず持ってしまう。どうせ前の店みたいに楽しいわけがない、というスタートラインで、いろいろな意味で気になっているものの、何となく、入ってみる気がしない、と。というか入る勇気がでない。

お酒を飲まないヒトには理解しにくいかもしれませんが、町の酒場はどこでも、ただお酒を飲んで酔うことができればそれでいい、という場所ではありません。お店の人の人柄やセンス、気の合う常連さんや気の合わない常連さん、そのお店ならではの会話のトーン、当然口に入れるもの

の味や値段のバランス、幾つもの要素が複雑に科学変化を起こして「その店ならではの」時間を作ります。

ですから、全く同じ場所で店内の基本構造も同じで、なのに全く知らない人が全く違う暖簾をかけて酒場を開いている風景って、死んだはずの仲間が、全く違う人格で目の前に現れた、というくらい、不思議で受け入れにくい状況なんです、例えば悪くてごめんなさい。

そんなこんな(´・`;)で、先日、ようやくそのお店に行ってきたのです、恐る恐る。

以前のお店の頃からの飲み友達と、どうか先に行ってみてチョーだい、そんなもつて、どんなお店になっちゃってるんだか報告してチョーだい、となすり合いを続けていたのですが、ついに友人から、行ってみたとのメールが。そこには、あまり良くない感想で、僕も二の足を踏んでいたのですが、ちよつとほろ酔い気分でその店の前を通りかかって、何となく、ホントーに無意識に入ってしまったんですね、でも、恐る恐るだけ。

とてもチャーミングな女性のカウンターの中に。僕も恐る恐るなら、よく考えるとお店側も僕に対して、恐る恐る、なんですよね。「前のお店からの常連の方ですか?」と、ぎこちない導入会話から、気が付いたらあつという間に居心地のいい空間になっていました。

その女性がひとりで切り盛りしている明るくて清潔な立ち飲み屋さん。

何より驚いたのは、まだ若いのに、料理に全く妥協が

エッセイスト 北園修

横浜生まれ、横浜育ち。東京コピーライターズクラブ在籍。クリエイティブディレクター、エッセイスト。

ない、という事でした。そして。自分の理想の立ち飲み屋さんを、自分の手で作るのだ、といった、覚悟。まだ開店して数か月しか経っていないのに、その界限では一番の繁盛店になっていますね。

美味しいおつまみ、会話の回転の速さ、丁寧な言葉遣い、細かな気遣い、そりゃ繁盛するわな。若いのに、たまごやき、だとか、おから、だとか、ビジキ、だとか、クラッシュクモモノもしっかり作れたりね。なんだか信用できる味。

すでに、支店だそうかなあ、などと彼女は言っていますが、それが、かなり現実味を帯びて聞こえます。

お店は、横浜のはずれの港町にあります。お店の名前のヒントは、笑顔を表現するときに使うコトバ。興味のある方は自粛騒ぎが終わったら、探してみてください。お勧めです。あ、その若いけど肝の座った女将さんは、身長、147センチ、かわいいおちびちゃんです。



Photo:藤間 久子「Slowly」

岡山県生まれ。JPS(日本写真家協会)会員。カメラマンとして活動の傍ら、個展やフォト&エッセイなど自分の作品づくりに励んでいる。